

成願寺

季報

132

令和4年6月18日
(2022年)

目次

成願寺の梵鐘について(前編).....	1
中野たから幼稚園「芋掘り遠足」の報告.....	6
山内短信.....	8

発行 多宝山成願寺
〒164-0012 東京都
中野区本町 2-26-6
電話 03-3372-2711
制作 地人館

成願寺の梵鐘について(前編)

文化・文政期(一八〇四〜一八二九)に林述斎^{はやしじゆうさい}ら
によつて編纂された、武蔵国の地誌『新編武蔵風土
記稿^{きこう}』に成願寺の由緒が記されていますが、その後
半部分で伽藍の説明があります。その記述によりま
すと、



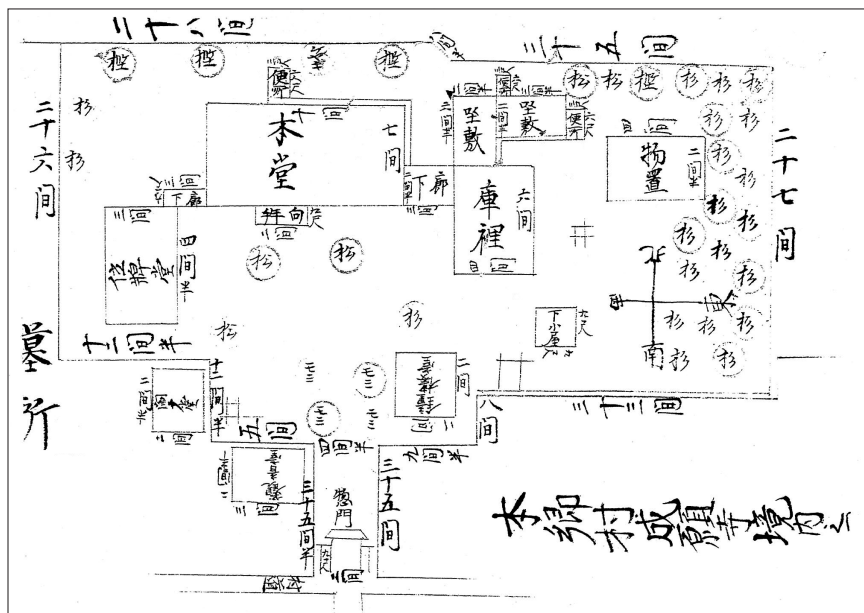
孟蘭盆先祖まつり(おせがき)のお知らせ

七月十一日(月) 朝十時半受付開始
十一時半 開山・歴住諸大和尚報恩供養
十三時 説教
十四時 先祖まつり法要・檀信徒総回向

表門 二間に九尺

本堂 十間に七間南向
本尊 釈迦 木の坐像にて長一尺五寸 聖徳太子
の作 脇士文殊普賢
位牌堂 門を入て左の方にあり 四間半に三間
衆寮 位牌堂に作りかけてあり
鐘楼 門を入て右の方にあり、二間四方、鐘の径
二尺七寸、高さ五尺三寸、延享四丁卯年九月鑄し
ものなり……

と記されています。明治十年(一八七七)、政府に
提出した「寺院明細簿」に付記された境内図を見ま



すと、それらの位置が分かります。これら伽藍は昭和二十年（一九四五）五月二十五日の山の手大空襲の際に焼失してしまいましたが、梵鐘は避難してあり無事でした。戦後の混乱期が落ち着いた昭和三十九年（一九六四）、三十三世義堯大和尚によって、黄檗様式の三門（山門）が建立され、その楼上を鐘楼として梵鐘が安置されて現在に至ります。

鐘は、仏教発祥以前から古代中国で銅器として作られていましたが、やがて東アジアの寺院などで仏教の法具として使われるようになりました。

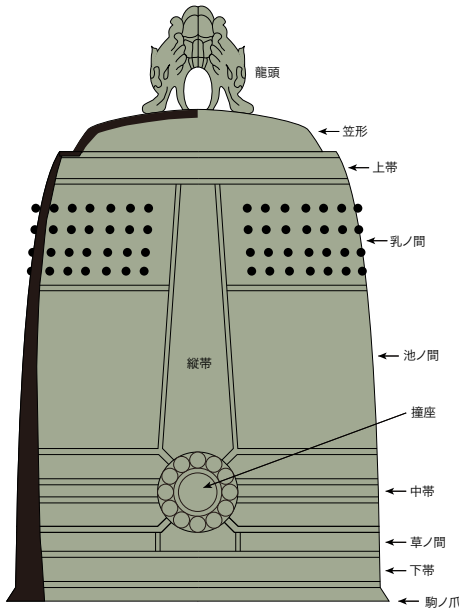
日本では神聖・清浄を意味するサンスクリット語から音訳した「梵」をつけて梵鐘と呼び、法要など仏事の予鈴として撞かれるなど、重要な役割を果たしています。朝夕の時報や除夜の鐘で知られるように、その響きは一切の苦から逃れ、悟りに至る功德があるとされてきました。

梵鐘の法量

鐘の大きさは三つに分類されています。およそ口径一尺（約三十cm）以下のものが喚鐘（かんしょう）、二尺二・三寸（約六十六cm）以下のものが半鐘（はんしょう）、半鐘より大型のものが梵鐘です。

梵鐘の細部の寸法は、ある程度比率が決まっています。例えば、鐘の縁の厚さは、差し渡し寸法（直径）の約十分の一であり、龍頭までの高さは差し渡し寸法のほぼ一・四一倍が基準となっています。

成願寺の梵鐘の場合、『新編武蔵風土記稿』には、「鐘の口径二尺七寸（百二cm）、高さ五尺三寸（約百六十cm）」とありますが、実際に計ると、口径約八十四cm、梵鐘上部の龍頭を除いて計ると高さ約百二十三cmです。縁の厚さ八・五cm、龍頭までの高さが口径の一・四六倍となっており、基準に近い数



値といえます。

余談になりますが、この一・四一という数字は、平方根による $\sqrt{2}$ と同じ値で、そもそもメートル法が制定される前まで使用していた曲尺のメモリの裏側の長さが表側の長さの一・四一四になっていることと大きな関係があると思われます。

古代ギリシアの頃からの美の黄金比は一対一・六一八とされていて、レオナルド・ダヴィンチの「モナ・リザ」にもその比率が使われているそうですが、日本独特の黄金比（大和比）は、一対 $\sqrt{2}$ の一・四一四と、一対 $1+\sqrt{2}$ の二・四一四が基本とされ、和風建築や仏像の顔もその比率で作られています。

鐘の部位の名称

鐘の厚さというと、上から下まで一定ではありません。鐘の各部分の名称は図の通りで、黒い部分は厚さを示しています。

正面の縦帯の下部に、撞木しゅもくのあたる撞坐つぎざがあります。通常真裏の縦帯の下部にも撞坐があります。撞坐の位置は、近世以前は鐘の中央部にありましたが、音色の良さなどの試行錯誤をして、徐々に下がっていききました。成願寺の鐘の撞坐も、成熟期に作られ

たためだいぶ下の方につけられています。

縦帯は、左右にもありますが、こちらには撞坐はありません。この四本の縦帯によって分割された四つの面を池ノ間といい、ここにいろいろな銘が彫られます。また、銘の入れ方には二つの方法があります。一つは梵鐘の鑄型に文字を左右逆に彫り込んで、鑄こんだ時に文字が浮き上がる方式。もう一つは鑄こんだあと、鑿^{ののみ}などで文字を彫る方式です。前者を陽鑄^{ようちゆう}、後者を陰刻^{いんてく}と言います。

梵鐘の銘

梵鐘には、さまざまな銘が彫られます。だいたい、梵鐘制作の意義、造立される経緯が記されています。また、寺の所在地、造立したときの住職名や施主の名前、造立された元号、梵鐘を作成した鑄物師^{もじ}の名前等が記されます。成願寺の梵鐘を左回りに眺めてみます（改行を省略する部分は／で表記。また、読みやすいように、句点・返り点などを入れました）。

縦帯1撞坐（陽鑄）

先祖代々為「菩提」

三界萬靈一家生靈為「菩提」



縦帯1は、梵鐘鑄造の目的がしっかりとした書体で陽鑄され、更に撞坐がしつらえられているので、梵鐘の正面となります。先祖代々の菩提のため、そしてあらゆる靈の菩提を念じて造立されたことが分かります。

正面に向かつて左側の池ノ間1には、四十五人の戒名に「涅槃經」の四句偈が添えられ、明暦元年（一六五五）の年号と施主と思われる矢沢八右衛門の名前が陰刻されています。

池ノ間1（陰刻）

【二段目】

武州多麻郡中野郷／龍雲山正観禅寺
法独室之代／鐘之助力

真井小左衛門／山下伊右衛門／渡辺與兵衛／☐江
本兵衛／松下太☐右衛門／吉田兵部之丞／川本四
郎右衛門

諸行無常／是生滅法／生滅滅已／寂滅為樂

時明暦元乙未中秋

彼岸日／于主矢沢八右衛門

【二段目】

道宗禪定門／秋月妙閑信女／覚本正徹信士／妙
栄尼／真證道諦信士／臨靈童女／秋山昌桂信士／
智願院釈宗円信士／釈 円 尼／釈宗雲信士／釈
善性禪定士／釈真□信女／規量院□心常昇居士／
浄自院実譽真雪大姉／紀心隆慶信士／霞閑陽春信
女／善寂光洋信士／春山妙慶信女／黄山亮運信士
／綠營了同／空營了本／光真院日雲是松大姉

【三段目】

先祖為菩提淀橋／鍛冶屋中村氏／八左衛門／同
当村／秋本長右衛門／同 入間村／吉田金五郎／
同／梅軒清晩／日□高月居士／衆法妙休大姉／西
臨道方信士／孤室妙心信女／洞林宗仙禪定門／法
雲貞性禪定尼／量山法寿居士／霜庵浄清信士／月
桂叟秋信女／先祖為菩提中野村／小泉五兵衛／花
栄切覚信士／光岸即心信女

一段目初めの「武州多麻郡中野郷 龍雲山正観禪
寺 法独室之代 鐘之助力」と後半の「諸行無常

是生滅法 生滅滅已 寂滅為樂 時明暦元乙未中秋
彼岸日 于主矢沢八右衛門」が注目されます。

この梵鐘は、次号で紹介しますが、池ノ間2の由
緒書きにあるように、延享四年（一七四七）に十二
世声覺了聞大和尚の代に造立されたものです。しか
し、池ノ間1には、「独室之代」つまり成願寺七世
独室全之大和尚の名前とその在世中にあたる明暦元
年（一六五五）秋の日付が陰刻されているのです。

独室全之大和尚は、承応三年（一六五四）に、本
堂を整備し本尊を安置したことで、再中興とされて
いる住職です。「鐘之助力」とありますので、本堂
を整備の際に（延享四年へ一七四七）には、既に無
くなっていたとされる）梵鐘（旧）の造立と関係が
あり、新しく鑄造した梵鐘（新）に独室全之大和尚
と助力した人たちの戒名を付記したと考えることが
できます。

もう一つ、「龍雲山正観禪寺」という表記も注目
されます。もともと当山は鈴木九郎長者の娘小笹の
法名をとって正観寺という寺号でした。後に成願寺
となったわけですが、明暦の頃はまだ正観寺だった
ということが確認できます。

（以下次号）

中野たから幼稚園「芋掘り遠足」の報告

去る十月二十九日（金）、年中組、年長組の芋掘り遠足が行なわれました。

園庭に集合すると、みんなで元気にごあいさつ。副園長先生から「今日は良いお天気に恵まれました。お芋畑に着いたら、爽やかな風や土の匂い、虫さんもあるかもしれません。秋の自然を感じながら楽しい芋掘り遠足にしましょう」とお話がありました。

感染症対策として大型バスは四台。クラスごとに乗車して、子どもたちは全員窓側だけに座ってゆったり。換気のために少しずつ窓を開け、シートベルトをすると見送りの保護者に手をふって出発です。



ご父母の皆様に見送られて「行ってきます！」



大型バスに乗り込む子どもたち

運転手さんに「よろしくお願いします！」と元気にご挨拶。バスは練馬インターから関越自動車道を一歩川越の「あらはた園」さんへ向かいます。

車中では先生方が工夫して、子どもたちは青い車探し競争や自動販売機探し競争をして、自然と窓の外を見るように。また、雪化粧も美しい富士山を車窓から眺めることができました。

主事先生からは、「今日はみんなを送り出してくれたお家の方々、留守番の幼稚園の先生方も、みんながお芋掘りを楽しんでほしいなと思っています。大きいお芋、小さいお芋、お友達の方がたくさんとれたなんてことがあっても、送り出してくれた方々



「先生、見て！見て！」



大きいお芋が「掘れた！」



に楽しかったと報告ができるように、土の感触を楽しんで掘ってください」とお話がありました。

十二支の物語を聞いているうちに、バスは川越インターへ。高速を降りるとしばらくして「あらはた園」へ到着しました。荷物を置くと、早速お芋掘りへ。茎を目印に掘り進めて思いっきり引っ張ると、四個も五個もお芋が付いていて、いたる所で歓声が上がります。「先生、見て！ 見て！」の大会唱です。大きなお芋の周りを掘っても掘ってもなかなか抜けない子もいましたが、がんばって掘れた時は大喜び、大満足でした。お家の方が用意してくれた袋がばんばんになるほどたくさん収穫して、子どもたちは運



カメラマンさんによる記念撮影



土でよごれた手、よく洗います

ぶのに一苦労。でもとても誇らしげでした。

お気に入りの一本を持って記念撮影のあとは、お家の方が持たせてくださったおにぎりランチです。担任の先生からはゼリーのデザートが配られて、働いた後ですから、いつも以上に美味しくいただきました。ご飯のあとは近くの林の中へ。どんぐりがたくさん落ちていて、しばらく探索を楽しみました。手洗いを済ませて農園の方にお礼のご挨拶をすると、幼稚園への帰路に着きました。

帰りのバスの中では、お芋でなにを作ってもらおうかと話す子どもたち。「ふかし芋！」「大学芋！」「天ぷら！」などの声が聞こえました。



感謝して「いただきます！」



木陰の気持ちいい林の中でどんぐり拾い

山内短信

◎大般若祈禱会の報告



去る一月九日（日）、新春恒例の大般若祈禱会が厳修されました。『摩訶般若波羅蜜多經（大般若經）』六百卷が方丈様方によって転読されると、その功德をもつて、世界平和や感染症終息、参列者の家内安全や心願成就などが祈念されました。

◎たから第八天大祭の報告



成願寺から山手通りを南へ五分ほどのところに境外堂「たから第六天」が祀られています。開基の鈴木九郎がこの地を開拓した際に土地の恵みと人々の幸福を願って奉安しました。以来六百五十年にわたり、近隣の人々に親しまれています。去る五月八日（日）、弥生町一丁目東町会の皆さんにより、二年振りとなる大祭が企画され、住職がご祈禱を厳修しました。

◎ご挨拶

成願寺内 小林 堯成

この度、令和四年四月二十六日をもって、大本山總持寺での修行生活を終え、成願寺に帰山いたしました。

人と人との繋がりや、自分と向き合うことの大切さを学ぶことのできた貴重な二年間でした。小学校から大学まで打ち込んだラグビーよりはるかに辛く、大変な修行生活だったというのが率直な気持ちです。そんなつらい修行でしたが、生活を共にする仲間

との絆が強くなりました。また、三十数年前に父も修行していた場所でもあるので、当時を知る諸先輩僧侶方々にお会いしたときはたくさんの叱咤激励を頂き、その言葉全てが勉強になるものばかりで、なんとかがんばることができました。

成願寺は六百五十有余年の歴史があり、幼稚園も経営しています。幼稚園は仏教の役割として大切な幼児教育の場です。代々の住職が守ってきたこのお寺と、先代住職が創設し間もなく七十周年を迎える幼稚園をこの先も守っていく所存です。

檀信徒の皆様、有縁の皆様健康第一をお祈りし、併せて一層のご鞭撻をお願いして、御報告と御挨拶を申し上げます。

合掌